View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

# 荒木田麗女作『豊臣の辞・大江の賦』翻刻（一）

雲岡　梓

本稿は白百合女子大学図書館蔵『豊臣の辞・大江の賦』の「豊臣の辞」の部分の翻刻である。

『豊臣の辞・大江の賦』は、従来所在不明とされていたが、白百合女子大学図書館での所蔵を確認することができたため、ここに翻刻することとした。

著者は伊勢の女流文学者、荒木田麗女である。生年は享保一七年（一七三二）、没年は文化三年（一八〇六）。号は紫山、清渚。字は子奇。

麗女は平安王朝を舞台とする擬古物語を中心に、歴史物語、紀行文、連歌、俳諧など、様々な著書を遺している。その代表作には高倉天皇、安徳天皇二代のことを書いた歴史物語『月の行衛』や、後醍醐天皇から後陽成天皇までのことを書いた歴史物語『池の藻屑』、王朝物語『桐の葉』などがある。

奥書によると、本書は安永七年（一七七八）冬に書写された。

本文は戦国時代の始まりと天下の移り変わりについて述べつつ、豊臣秀吉の栄華とその死までを中心に、秀吉を賛美する姿勢で記されている。

書誌ならびに凡例は以下の通りである。

【書誌】

［底本］白百合女子大学図書館蔵本　二巻一冊

［表紙］灰色無地　縦二二・七糎　横一六・二糎

［体裁］袋綴
［用紙］楮紙
［外題］「豊臣の辞　大江の賦」題簽左肩
［内題］「豊臣の辞　賦陸奥羽林」
［所蔵者整理名］「豊臣の辞・大江の賦」
［丁数］一七丁
［行数］不規則
［構成］豊臣の辞（本文・七丁）賦陸奥羽林（本文・九丁）空白・一丁
［奥書］前惟写一本於摂坂為人／被失仍今又再写之者／安永七戌年中冬／荒木田氏

今号では『豊臣の辞・大江の賦』の、「豊臣の辞」のみの翻刻であるが、底本の形を極力復元できるよう、忠実に翻刻した。ただし、読み易いように、次のような方針で翻刻する。

【凡例】

(1) 漢字の旧字体は、適宜現行の字体に改めた。
(2) 本文には、読み易くするために句読点を適宜補った。
(3) 本文には、必要に応じて濁点を付した。
(4) 底本の仮名遣いや表記はそのまま残した。
(5) 改行は、原文に従った。
(6) 丁の変わり目は、一行空白を空けて示す。
(7) 和歌は、底本と同様に独立させ、一字下げにして示す。
(8) 底本の損傷によって判読が不可能な箇所は、□とした。
(9) 「ゝ」「〳〵」「々」などの反復記号は底本のままとした。また、反復記号にも必要に応じて濁点を付した。
(10) 底本には本文の上に注を掲げている部分があるが、注の部分に関しては翻刻しない。

【翻刻】

豊臣の辞

*足利とて清和の源より出る
ながれをくみたる人なん、
そのかみ元弘の頃ほひより、
代々うちつゞき、天が下の
*弓箭の道をつかさどりて、
よろづの国を治る謀怠らず
ありつれど、

其始よりあやしう*国々乱れ
たちて麻のごとく成しかば、
いかめしきいきほひも日に
そひておとろへつゝ、
終に*十継あまり五つばかりに
あたりては、都の内にさへ
在わびつゝ、直人のやうに
境を出てさすらへぬ。

又*織田とて、こたびは桓武の
末葉二十□にて、先のにも
劣らぬ人がらにて、矢たけ、
心はこよなう増りたれば、
*縦横の計なりて、*鹿を逐の
志もせちなれば、斯だに世は
治りぬらんと、皆人うしろ
やすくおもひあへるに、

宿世のほどいと口おしく、
思ひかけず*漁陽の鼙鼓
地を動して来り、*仇の風
大きなる波のまぎれに
あへなくほろびぬ。
いとゞ世もみだれまさりて、

都も鄙もすべて*軍の園と
成つゝ、貴きも賤しきもみな

弓矢の道をのみ求めて、
*孔孟の尊きをしへさへ
用ゆる事なき世となりし
より、*九重の城闕も煙塵に
掠られ、四方の関門は*黄雲に
閉られぬる有さま、さらに云
やらんかたなし。西京の国々
には*七雄並びきりて*囲碁
の争ひをなせり。いかなる
人か、かばかりの世を治めんと
おぼゆるに、*豊臣とて、はか〴〵
しき人数にもあらぬが、
すぐれて心おきてひろく、
よく国民を理る計略も
いみじければ、いつとなく
諸人の従ひ聞て、程なく
勢ひも殊のほかになりつゝ、
都ちかきわたりは更にもいはず、
遠くいくさを出して辺疆を治め、
遥に簇手を進めて*胡虜を
平げ、*策を仗て天子に謁し、
*軾に憑て東藩を下せしより、
*六王畢て、四海一なる時とぞ成ぬ。
やがて都の内に、*阿房宮ばかりの
殿作り、いかめしうして住て、
上なき位をきはめて、万の事
心にまかせたり。さしも猛かりし
こゝろにも、又物の哀をしり
て、*花をめでゝは芳野の山の
春のかすみをわけまよひ、
*月を思ひては雲井の庭の秋の
露にそぼちて、

高き交りをなんしつるより、
*紅葉の折をも待ぬ。紅葉の
頃しも、*御幸をさへもよほし
きこえたる、いといみじ。又閑
なる折々は人をやりて遊び
などをもしつゝ、今は*刑鞭
蒲朽て蛍空しく去、諫鼓苔
深うして鳥驚かぬ世なりとて、
民の心をもなぐさむべく、
*舞の袖をさへ返したるは、

*鴻門の古へには、やうかはりて、
千年の後の例しにも成ぬべく
なん。かくしてしも有つべき世を、
さすがに武士心のおゝしくて、
*見ぬ唐土をさへ随へん事を
思ひて、*大きなる船共造り
出つゝ、数多の軍を催しつる

にぞ、西の国の兵は残りなく
出立ぬ。みづからも都を出て、

*筑紫の方に仮なるしつらひ
して行通ひつゝ、かしこの便
覚束なからず聞わたるに、
*纓を請にはあらねど、南誠を
つなぐばかりの*いさほしも
残つれど*猶あかずとて、
いどみかはせる戦のにはには、
*花飛蝶驚け共、人は春の
暮るを知らず。*節去蜂愁ふ

れ共、誰か秋の別れを惜しむ共
なきに、*風雲人前に向て
過易く、歳月老底より
かへりがたきならひとにや、
いまだ凱歌をもとなへざるに、

*伏見のわたりは、草葉のつゆ
ひかりをかくせしかば、
天が下は*照日の暮し思ひ
して、物おぼゆる人もなし。
国の中のみにもあらず、唐土
なる人々もおなじこゝろに
思ひまどひつゝ、今はとて
ひきゐて帰りぬ。誠にたぐひ
なき誉れえつる人なりとて、
つゐは*神にあがめて仰ぎ
まつりつるは、又なき身の後
の栄へぞかし。さはいへど、*桑田
碧海はやくあらたまり行に、
*靡きし秋の霜消てとは
まづいはれぬべく、*蜀相の
祠堂何れの所にか尋んと



うちわびて、*長く英雄の
涙中にみつる有ぬべくなん。
　入果し雲居の月は梓弓
　ひきかはる世を空に知れとや

【語注】

**○足利とて清和の源より出るながれをくみたる人**　室町幕府将軍家、足利氏。初代将軍足利尊氏は清和源氏の家系で、河内源氏の棟梁、八幡太郎源義家の子の義国を祖とする、足利氏の嫡流。

**○弓箭の道**　弓矢をとる者の道。武道。ここでは将軍として武家政権を治めていること。

**○国々乱れたちて麻のごとく成しかば**　「三川の北虜乱れて麻の如く」（李白「永王東巡歌」其の二）「乱れて麻の如く」は、麻糸がほつれたように、めちゃめちゃに乱れること。

**○十継あまり五つばかりにあたりては**　室町幕府十五代将軍足利義昭は、永禄十一年（一五六八）十月織田信長

に擁されて将軍となる。のち信長と不和を生じ、天正元年（一五七三）七月京都を追われ、幕府は滅亡した。

**○織田とて、こたびは桓武の末葉二十□にて**　織田信長は朝廷工作のため系図の改竄を行い、桓武平氏の末裔を称した。信長は当初藤原氏を名乗っていたが、足利氏に代わって天下を治めることを内外に宣言する頃から、源平の政権交代思想を意識して、桓武平氏・平清盛の孫、平資盛の末裔と称した。

**○縦横の計**　「縦横の計は就らざれども　慷慨の志は猶存せり」（魏徵『唐詩選』巻一「述懐」）「縦横の計」は戦国時代の「合縦連衡」の計。「合縦」は蘇秦の提唱した韓・魏・趙・燕・楚・斉の六国が縦（南北）に同盟を結び、強国秦に対抗する策。「連衡」は張儀の提唱した六国が横（東西）の方向に当たる秦に服事し、和親する策。ここでは信長が東西南北の大名たちを従え、天下統一を成し遂げようとしたこと。

**○鹿を逐の志**　「中原還た鹿を逐い　筆を投じて戎軒を事とす」（魏徵『唐詩選』巻一「述懐」）「鹿」は天子など権力のある地位をたとえる。織田信長が天下の覇者を目指したこと。

**○漁陽の鼙鼓地を動して来り**　「漁陽の鼙鼓地を動もして来たる　驚かし破る霓裳羽衣の曲」（白楽天『長恨歌』）安禄山の叛で、安禄山が漁陽から陣太鼓の音を響かせて長安に攻め込む際の描写。安禄山は玄宗皇帝に重用されていながら玄宗皇帝を裏切って乱を起こし、都長安を占拠した。明智光秀を安禄山に例え、天正一〇年（一五八二）六月の本能寺の変を指す。

**○仇の風**　「唐土に至らむとするほどに、あたの風吹きて、三つある船二つはそこなはれぬ。」（『宇津保物語』「俊蔭」）仇の風は、仇や害をなす烈しい風。

**○軍の園**　「正成は聖徳太子の御墓の前を戦さのそのにして、出であひ駈け引き、寄せつ返しつ、潮の満ち干く如くにて」（『増鏡』「久米のさら山」）軍の園は、戦場。

**○孔孟の尊きをしへさへ用ゆることなき世**　「静かなる世には、文を以つていよいよ治め、乱れたる時には、武を以つて急に静む。故に戦国の時には、孔孟用ふるに足

らず、太平の世には干戈用ふること無きに似たり。」（『太平記』巻二「長崎新左衛門尉意見付けたり阿新殿の事」）。

**○九重の城闕も煙塵に攪られ**　「九重の城闕に煙塵生ず」（白楽天『長恨歌』）城闕は城門。

**○黄雲**　土けむりのこと。

**○七雄並びきりて**　七雄は中国の戦国時代における、秦・楚・燕・斉・趙・魏・韓の七強国。ここでは各地の諸大名が天下の権を争ったこと。

**○囲碁の争ひ**　「聞道く長安は奕棋に似たりと」（杜甫「秋興」）奕棋は囲碁のこと。囲碁の勝負のように領地をめぐって争い、政局の変化が激しいこと。

**○豊臣**　豊臣秀吉。安土桃山時代の武将。織田信長に仕え、重用され、筑前守となる。本能寺の変後、明智光秀を討ち、四国・九州・関東・奥羽を征して天下を統一する。天正一三年（一五八五）には関白となり、翌年豊臣姓を賜る。天正一九年（一五九一）に関白職を養子秀次に譲り、太閤と称した。

**○胡虜を平げ**　胡虜は北方、または西方の異民族を表す漢語。秀吉が国内の敵対する大名を服従させたことを指す。

**○策を仗て天子に謁し**　「策に仗りて天子に謁し　馬を駆りて関門を出ず」（魏徵『唐詩選』巻一「述懐」）策は馬の鞭、仗は杖をつくこと。後漢の鄧禹は、光武帝が王莽を倒す旗あげをしたと聞き、馬の鞭を杖にしてつきながら会いに行ってその部下に加わり、将軍として大功を立てた。この故事に基づく。

**○軾に憑て東藩を下せしより**　「軾に憑りて東藩を下さん」（魏徵『唐詩選』巻一「述懐」）憑はよりかかること。軾は車の前にある手すりの横木。東藩は東方にある諸侯の国。漢の酈食其は策謀に富み、「軾に伏して（武力を用いないで）」斉国の七十余城を降服させた故事による。天正十八年（一五九〇）の小田原征伐の際、北条氏政・氏直父子は小田原城に籠って籠城作戦をとったが、後に降伏し、秀吉が戦いらしい戦いなくして関東を平定したことを指す。

**○六王畢て、四海一なる時とぞ成ぬ**　「六王畢って四海

一なり　蜀山兀として阿房出づ」（杜牧「阿房宮賦」）六王は、戦国時代の末期、秦に対抗する六つの国、斉・楚・燕・韓・魏・趙の君主。秦の始皇帝は前二二一年、六国を滅ぼして天下を統一した。その時の詔勅に、「六王は咸其の辜に伏して、天下大いに定まる」といったことによる。四海は国内・天下のことをいう。

○**阿房宮**　秦の始皇帝が天下統一後、渭水の南、長安の西北の阿房に建てた宮殿。天正十四年（一五八六）秀吉が京都に造営した聚楽第を指す。

○**花をめでては芳野の山の春のかすみをわけまよひ**　文禄三年（一五九四）二月二十七日、秀吉は関白秀次とともに大和吉野に花見に出かけ、吉水院に宿をとって清遊をこころみた。公家衆・諸将がこれに従う。

○**月を思ひては雲井の庭の秋の露にそぼちて、高き交りをなんしつる**　天正十六年（一五八八）年八月の十五夜の夜、聚楽第にて月見の歌合が行われた。また天正十三年（一五八五）七月、近衛前久の猶子となり関白宣下を受けて以降、秀吉が朝廷に近づいたことをも暗示するか。

○**紅葉の折をも待ぬ**　「小倉山峰のもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆきまたなむ」（藤原忠平『百人一首』）

○**御幸をさへもよほしきこえたる**　天正十六年（一五八八）四月、後陽成天皇聚楽第行幸。

○**刑鞭蒲朽て蛍空しく去、諫鼓苔深うして鳥驚かぬ**　「刑鞭蒲朽ちて蛍空しく去る　諫鼓苔深うして鳥驚かず」（藤原国風『和漢朗詠集』巻下、帝王）「刑鞭蒲朽ちて蛍空しく去る」は、後漢の劉寛が寛大で、部下の過失を誡めるのに柔らかい蒲の鞭を用いたという故事に基づく。国がよく治まり罪人がいないので、その蒲の鞭さえ使われずに空しく朽ち、蛍に変じて飛び去ったとして、世の中がよく治まっているさまを表す。「諫鼓苔深うして鳥驚かず」は、堯が自分を諫めようとする者に鼓を打たせて、傾聴した故事に基づく。その諫めの鼓も使われずに苔むし、鳥もその音に驚かされることはないとして、同様に世の中がよく治まっているさまを表す。治世を讃える際の例えとして、『太平記』や『曾我物語』など様々

な書物に引用される。「虞芮の訟へたちまちに停まつて、荊鞭も朽ち果て、諫鼓も打つ人なかりけり。」（『太平記』巻一「飢人窮民施行の事」）「刑鞭蒲くちて、蛍むなしくさり、諫鼓苔ふかうして、鳥おどろかぬ御世、しづかなるにより」（『曾我物語』巻五「浅間の御狩の事」）

**○舞の袖をさへ返したるは**　秀吉は能に深い関心を持ち、金春八郎から能の伝授を受け、伏見城で自ら能を演じた。更に文禄二年（一五九三）十月五日から三日間、秀吉は宮中で猿楽を演じる。また、大村由己に命じて『芳野花見』『高野参詣』『明智』『柴田』『北条』の、秀吉を主人公とした一連の新作の謡を作らせた。

**○鴻門の古へ**　鴻門の会を指す。前二〇六年、鴻門で劉邦が項羽に会見した際、項荘が宴席での剣舞にことよせて劉邦を殺そうとしたが、それを知った項伯が剣舞に加わり、劉邦を守った故事による。

**○見ぬ唐土をさへ随へん事を思ひて**　文禄・慶長の役。文禄元年（一五九二）四月の釜山浦上陸をもって開始された秀吉による「唐入り」計画。翌年明との間に停戦協定が結ばれたが、両国間の和平条件の齟齬のために破れ、慶長二年（一五九七）に再開された戦闘は翌年八月の秀吉の死に至るまで続いた。

**○大きなる船共**　天正十九年（一五九一）年、秀吉は九鬼嘉隆に命じ、朝鮮出兵に向けて伊勢浦で軍船数百艘を造らせた。

**○筑紫の方に仮なるしつらひして**　天正十九年（一五九一）十月、「唐入り」計画を正式に発表した秀吉は、遠征軍の本営を名護屋（佐賀県鎮西町）とすることを決め、九州の諸大名を中心に築城工事を開始した。

**○纓を請にはあらねど、南誠をつなぐばかりの**　「纓を請うて南粤を繋ぎ」（魏徵『唐詩選』巻一「述懐」）纓は冠の紐。繋はしばること。南粤は南越とも書く。現在の広東・広西省のあたりにあった国。漢の終軍が南越王に帰順をすすめる使者に立ったとき、「冠の長纓をいただき、それで南越王を縛り上げて都へ連れて来ます」と言った故事に基づく。

**○いさほし**　いさをし。功績のこと。

○**猶あかずとて**　秀吉が朝鮮に渡航させた宗義智と小西行長の率いる軍は、天正二〇年四月、朝鮮の釜山城を陥落させ、二人の朝鮮王子を生け捕りにする等の功績を挙げた。しかし秀吉はこの勝利に満足せず、更に大国明の征服をも目指した。

○**花飛蝶驚け共**　「花飛び蝶駭きて人を愁えしめず」（陸亀蒙『三体詩』上「鄴宮」）「花飛び蝶駭き」は、春が過ぎゆくことを表す。

○**節去蜂愁ふ**　「節去り蜂愁えて蝶知らず」（鄭谷『三体詩』上「十日菊」）節は節句。蜂は節句が過ぎたのを愁え、蝶はそれを知らずしてなおも花を慕う。どちらも秋の過ぎ去るのを悲しむ意。

○**風雲人前に向て過易く、歳月老底よりかへりがたきならひ**　「風雲は人の前に暮れ易し　歳月は老の底より還り難し」（良春道『和漢朗詠集』巻上、歳暮）老の底は、老の果てのこと。

○**伏見のわたりは、草葉のつゆひかりをかくせしかば**　慶長三年（一五九八）秀吉六十二歳で伏見城に没す。

○**照日の暮し思ひ**　「草深き霞の谷に影かくし照る日のくれし今日にやはあらぬ」（文屋康秀『古今和歌集』巻十六哀傷歌）文屋康秀が仁明天皇の一周忌に詠んだ和歌。

○**神にあがめて仰ぎまつりつるは**　慶長四年（一五九九）朝廷は秀吉に豊国大名神の神号を贈り、豊国社が設立された。

○**桑田碧海**　「已に見る松柏の摧かれて薪と為るを　更に聞く桑田の変じて海と成るを」（劉希夷『唐詩選』七古「代悲白頭翁」）桑畑が青海原に変わるように、世の中の移り変わりが激しいこと。秀吉の死後その跡を継いだ豊臣秀頼は、元和元年（一六一五）大坂夏の陣において徳川家康に破れ、豊臣氏は滅びた。この急速な豊臣政権の崩壊と、徳川政権への転換を指す。

○**靡きし秋の霜消て**　「草モ木モ靡シ秋ノ霜消テ空キ苔ヲ払ウ山風」（鴨長明『吾妻鏡』）／「草も木もなびきし秋の霜消て空しき苔をはらふ松風」（鴨長明『長春随筆』巻上）／「草も木も靡きし秋の霜消えてあとなきこけをはらふ松風」（鴨長明『拾遺風体和歌集』）　鴨長明が鎌倉幕府

将軍源頼朝の墓に詣でた際に詠んだ和歌。

**○蜀相の祠堂何れの所にか尋ん**　「丞相の祠堂何れの処にか尋ねん」（杜甫『蜀相』）蜀相は、蜀の丞相。諸葛孔明のこと。

**○長く英雄の涙中にみつる有ぬべくなん**　「出師未だ捷たざるに身先づ死し　長く英雄をして涙襟に満たしむ」（杜甫『蜀相』）魏を討とうとして北方に兵を出し、戦に勝たないうちに没した諸葛孔明を秀吉に重ね合わせている。

【解題】

「豊臣の辞」は足利氏の出自から語り起こし、次いで織田信長、豊臣秀吉と、武家の勢力の移り変わりを記している。そして秀吉の栄華から死までを、秀吉を賛美する姿勢で描いている。

「豊臣の辞」を内容的に三分割して考えるとすると、初めの部分では足利将軍家の没落により、戦乱の世となったこと、そして織田信長が天下統一事業を進めたが、本能寺の変によって志半ばで倒れたことを述べている。

次いで中間部分では、秀吉の台頭から豊臣政権の確立について述べ、その後の栄華の描写が続く。

そして最後の部分では、秀吉の朝鮮出兵の様子とその死について記し、文末には秀吉の死後の世の中の移り変わりを嘆く和歌を配している。

これらのことを、漢詩を典拠とした対句表現を多用して、流麗な文体で描いているのである。

秀吉は作中では徹頭徹尾ものの哀れを知る貴人として描かれていて、その出自の怪しさなどに関しては曖昧にぼかされ、語られていない。そして吉野の花見や舞などの伝統芸能といった風流な活動のみがことさら強調され、秀吉の美化、平安貴人化が行われているのである。

このように、戦国武将をあたかも平安王朝時代の貴人であるかのように描くという特徴は、麗女の代表作である、歴史物語『月の行衛』や『池の藻屑』とも共通している。

また「豊臣の辞」では秀吉の様々な文化的活動に比重

を置いて執筆していながら、有名な北野茶会に関して触れていないのは、茶という平安王朝時代に存在しなかった文化について記述することによって、平安王朝風の世界観が壊されるのを嫌ったのであろうか。

その一方で、戦いの描写にあたっては漢詩から多く引用することによって秀吉の事跡を示している。

それによって戦いの様子は具体性を欠き、秀吉に実在の戦国時代の武将ではなく、古代中国の武将であるかのような印象を与えている。

また養子であった関白秀次を切腹させたことや、その妻妾らを処刑したことなど、秀吉の行った残虐な行為については記していない。

加えて朝鮮出兵のような失敗に終わった事業に関しても、勝敗については曖昧にぼかし、秀吉の武勇を讃える形となっている。

これらのことから、「豊臣の辞」にみられる秀吉は、現実の秀吉とはかけ離れた、麗女によって理想化された秀吉像であるといえるだろう。

このように秀吉を文武両道の理想的な為政者として描こうという姿勢は、「豊臣の辞」という題名に如実に示されている。辞というものは中国の韻文体の一つであり、抒情性の豊かな韻文的要素の強いものという意味である。

麗女は題名に「豊臣の辞」と付けることによって、史実を踏まえた歴史物語ではなく、むしろ抒情性の豊かな秀吉を賛美する文章であることを表明しているのである。これは鏡物を継承するという姿勢で書かれている『月の行衛』、『池の藻屑』といった麗女の代表的な歴史物語とは一線を画すものであるということをも示している。

では、こうした麗女の秀吉贔屓は、どのようにして生まれたのであろうか。それにはまず、江戸時代における秀吉の評価について知る必要がある。

江戸時代、豊臣秀吉は民衆の間で非常に人気者であった。幕藩体制によって厳しい支配を受けていた江戸時代の民衆は、豊臣政権を古き良き時代と考え、秀吉への敬

慕を募らせていた。また、幕藩体制に対する不満の捌け口として、秀吉を肯定することで徳川家康を貶めるという側面もあり、秀吉の人気へと繋がったのであろう。そして卑賤の身から出世して太閤にまでなったことに対する憧憬や、わずか二代で滅びた豊臣政権の悲劇への同情も、江戸期における秀吉人気を支えた要因であると考えられる。

殊に江戸時代の大坂の人々には、豊臣政権時代には大坂が首都であったという意識があるため、秀吉の人気は絶大であった。

麗女も執筆活動を開始するより以前の明和元年（一七六四）頃、夫とともに摂津の住吉に住んでいた時期がある。そして伊勢に戻って後も夫婦でたびたび大坂を訪れていた。そのため麗女も大坂における秀吉人気の影響を受け、秀吉贔屓になったのではないだろうか。

また、本書の成立に関わると思われる記載が、麗女の自伝である『慶徳麗女遺稿』にみられる。その箇所を以下に引用する。



又その頃より、歌の方に心を入れて、和文をもかづ〳〵書き習ふ。これも良人のこのみにて、時につくの辞、豊臣大江等の弁なり。それより、日本紀をはじめ、我が朝の国史類、諸家の記等、又公事の書、有職の書の類をみるに、殊におもしろく、心とむるやうなりしかば、又、良人、さらに仮名国史に似たらんことをも書出でよと望まるゝにより、「池の藻屑」を書きたり。是は北海先生の序あり。跋は岩垣亮卿なり。後三角先生も序を添へらる。次に、「月の行へ」は、野公台の序あり。

これは明和五年春以降の、麗女が物語を執筆し始めた頃の様子である。

ここにみられる「豊臣大江等の弁」は、『国書総目録』や『女流著作解題』、伊豆野タツ氏の「荒木田麗女年譜」等においては所在不明とされているが、本書『豊臣の辞・大江の賦』と同一のものと見て良いだろう。

この記述に従えば、本書の成立時期は、明和五年（一七六八）頃から『月の行衛』『池の藻屑』の書かれた明和八年（一七七一）までの間であると考えられる。本書

の成立時期は麗女の代表作である『月の行衛』『池の藻屑』等が執筆されるよりも前であり、本書は歴史物語としての麗女の習作ともいうべき作品であると位置付けられるのである。

『月の行衛』『池の藻屑』の前段階とも言うべき本書は、所在不明のものが多い麗女の初期の著作を研究する上で、また麗女の歴史物語を研究するにおいても、様々な可能性を秘めていることを指摘して稿を閉じたい。

なお、「大江の賦」に関しては次号に掲載する予定である。

（くもおか　あずさ・関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程）